

「デブは出て行け!」と
追放されたので、
チートスキル【マイホーム】で
異世界生活を満喫します。

◆ ————— ◆
亜綺羅もも
Momo Akira

登場人物紹介

CHARACTERS

ライオウ

里奈の使い魔。
力仕事担当。

蓮

里奈の使い魔。
家事担当。

クマ

里奈の使い魔。
スキルの
解説担当。

ゆうき ひめの
結城姫乃

元の世界で
里奈を
いじめていた
同級生。

しも やなぎ かつ や
下柳勝也

里奈や姫乃と
共に召喚された
高校生。

イド

邪竜が人と
同じ姿を取った存在。
人間不信だが
気を許すと
ツンデレ。

リナ

えとうり な
(江藤里奈)

引きこもりだった
ところを異世界に
召喚される。
根っからの
お人好し。



目次

「デブは出て行け！」と追放されたので、
チートスキル【マイホーム】で
異世界生活を満喫します。

書き下ろし番外編

イドの秘密

「デブは出て行け！」と追放されたので、
チートスキル【マイホーム】で

異世界生活を満喫します。

突然、目の前が眩く光り、私は意識を失った。

そして次に目を覚ますと……そこは見知らぬ場所だった。

映画なんかで見る中世のお城に近いかもしれない。奥の方に、王様が座る椅子、玉座がある。その奥の方から手前まで、大きな柱が何本も並んでいた。だけど、二階部分に光を取り込む窓がいくつも備えられていることもあってか、暗いとか狭いって印象はない。ただ、遠巻きに私を取り囲むように、鎧を着た人やなんだか豪華な格好をしている人達がいて、ちょっと怖い。なんですか、これは？

「おお！ 召喚に成功したぞ！」

しょうかん？ ゲームなんかで竜とかを呼び出す召喚のこと？

でも、竜やそれに近い生き物はいないし……皆、私を見てる。召喚されたのって、もしかして私？

……違う。私だけじゃない。両隣に、というにはちょっと遠いけど、誰かいる。

右隣には日本の学生服を着た茶髪の男子がポカンとした表情で座り込んでいた。そのまま左手に視線を移す。

「っ！」

そこにいる人を見た瞬間、私の心臓が飛び跳ねた。身体が恐怖に震える。

金色に染めた長い髪に、私が通っていた高校の学生服を着た、吊り目の女性……姫ちゃんだ。結城姫乃ちゃん、私の知っている人だった。

「あれ？ あんた里奈ちゃん」

里奈……江藤里奈。それが私の名前。

彼女もこの状況に混乱してるみたいだったけど、私の顔を見てニヤリと笑う。反対に、彼女からさっと目を逸らした私の顔は、青ざめているだろうって自分でも分かる。

「ぶっ……ぎやはははは！ あんた、メチャクチャデブになってんじやん！ 相変わらず眼鏡だけど、豚じゃん、豚！」

姫ちゃんは私を指差し、腹を抱えて笑い出す。

そう、私は彼女の言う通り、ブクブクに太っているのだ。この姫ちゃんにイジめられて引きこもりになったのがそもその原因ではあるのだけれど……家から出られなく

なった私は、暴飲暴食の日々を過ごしていた。そのせいで以前は痩せていたのだけど、今は体重が九十キロもある。服装は学校のジャージ姿。これがまた恥ずかしさを倍増させていた。なんでこんな格好の時に……って、いつもこんな格好だけだ。

私は悔しさと恥ずかしさを抱きながら、俯いたまま姫ちゃんの笑い声を聞いていた。

私達の様子を見て、周囲にいる人達もクスクスと笑い出す。皆私のことを笑っているのだ。恥ずかしい……どんな罰ゲームでこんな場所に？ もうこれまで十分地獄を味わってきたんだから勘弁してほしい。俯いたまま、早く終われと周囲の様子を窺う。

隣にいる男子もニヤニヤと笑っていたけれど、ひと段落ついたところで、目の前にいる一番高貴そうな人に声をかけた。

「それより、なんだよここは？」

「おお、すまない。ここはメロディア。私はメロディアの国王じゃ。ここはお前達から見れば別の世界じゃな」

この人が王様だったんだ。でも、それよりもっと気になることがある。彼もそこが気になったようでそのまま聞いてくれた。

「別の世界？」

「ああ。この世界にはお前達の世界とは違い、モンスターと呼ばれる存在がおる」

「モンスターって……ゲームの世界かよ！」

「ゲームというのはよく分かんが……モンスター、という概念自体は通じるのじゃない？ とにかく、そやつらがいるだけでこの世界の土地が痩せ、自然が失われていくのだ。モンスターというのは自然の中にあるマナというものを吸い取って生きておるのだな」

「それで、姫らがここに呼び出された理由は何？ つまんない話だったら、姫、怒るかんね」

姫ちゃんは髪を指先でクルクルしながら王様にそう言った。視線は合わず、髪を見ながら。突然こんな場所に呼び出されて、彼女だって戸惑っているし、怯えているだけの私と違って、怒っている気がする。

そんな様子に、王様はあたふたし始める。

「お、お前達には頼みがあつて召喚をさせてもらったのだ」

「あのさ、まずその召喚ってなんなわけ？ まずはそこから説明してくんない？ このデブにも分かるようにさ」

視線で私を示そうとして、また嘔き出す姫ちゃん。皆も笑いそうになってなんとか堪えているみたいだ。私はまた俯いて、胃痛を感じ始めながら王様の話に耳を傾ける。

「召喚とは、別の世界から人を呼び出す術のことじゃ……そしてお前達を召喚したのは他でもない、そのモンスター達の支配者、魔族王を倒してほしいからじゃ」

「魔族王？ いや、そんなの倒す力なんてねえし」

茶髪の男子は鼻で笑いながらそう言った。

そりゃそうだ。私も姫ちゃんも、そしておそらくこの人も普通の人間。そんな私達に、魔族王だなんて物騒な人を倒すことなんてできやしない。

召喚するのなら、もつと強い生物を呼んだ方が良かったんじゃない？ ライオンとかゾウとか。そんなのでモンスターに勝てると思えないけど。

「いや、召喚された者は召喚された時、規格外のスキルを与えられるといわれておる」「スキル？ なんだそりゃ？」

「人それぞれに与えられた才能のようなものだ。それを調べるには——」

王様はスツと懐から大きな球を取り出した。占い師が使つてそうな大きな宝玉だ。

「これに触れれば、お前達のスキルを調べることができる」

「ふーん……」

茶髪の男子は少し楽しそうに、その宝玉に手で触れる。すると宝玉が光り、表面に文字が浮かび上がってきた。

「……【勇者】だよ」

「【勇者】！ これは間違いないく私達が望んでいたスキルの持ち主！ やはり規格外れの力を有しているか！」

周囲に歓声が響き渡る。それを見た姫ちゃんはニヤツと笑つて、男子を押しつけ宝玉に触れる。

「姫はどのようなの？」

またパツと光る宝玉。浮かび上がった文字を見て、姫ちゃんが口を開く。

「【大魔導】 って……どうなの？」

「【大魔導】！ それも凄まじいスキルに違いない！ この二人がいるだけで、世界は救われるぞ！」

「ま、流石姫って感じ？ やっぱヤバイよね」

姫ちゃんはその名の通り、周囲からお姫様扱いされるのが大好きで、学校でもいつも誰かに自分のことを褒めさせていた。誰も彼もが彼女を褒め称えるこの状況は、とても嬉しいに違いない。まあこれだけ人から賞賛されて、嬉しくない人はいないか。

「里奈。次はあんたがやりなさいよ」

そう言う姫ちゃんの顔は笑みを浮かべたままだけれど、笑顔の種類はさつきと別だと

はつきり分かった。私を蔑む顔、学校でよく見た顔だ。彼女にイジメられていた時の記憶が蘇る。

その顔を向けられると、今でも逆らうことができなくて……無言で頷き、ひんやりとした宝玉に手を触れた。

二人の時と同じように光を放つ宝玉。文字も同じように浮かび上がった。

……でも……これは……

「で、あなたのスキルはなんだったの？」

「……マ、【マイホーム】……」

「【マイホーム】って、家!? 何それ! マジ面白いんだけど!!」

大爆笑する姫ちゃん。これには王様達も大声で笑い、見下すような視線を私に向ける。どうやら大外れのスキルのようで、恥ずかしくて顔が上げられない。

しばらくして、ようやく笑うのをやめた王様達は、会話の続きを始めた。

「まあ、二人のスキルがあれば問題ないであろう。すまんが、世界を救ってくれないか?」

「ええ、どうしよっかな」

髪を指でいじる姫ちゃん。まんざらでもないような顔をしている。

「俺は別にいいぜ。モンスターと戦う勇者って、面白そうだしな。あ、俺は下柳勝也しもやきかつやよろしくな」

「姫は結城姫乃。気軽に姫って呼んでくれていいわ。仕方ないから、姫も世界を救ってあげる」

「カツヤにヒメか。いい名だ」

「わ、私は……」

「あ、お前の名前はいいから。外れスキルの豚になんて用はねえよ」

下柳くんがそう言い放つと、また大爆笑が湧き起こる。私は泣き出しそうなのを我慢して、震える声で王様に訴えた。

「わ、私は帰ります。だから今すぐに帰してください……」

「ああ、すまん。召喚は一方通行でな。私の力で帰してやることはできないのだ」

「ええ……? じゃあ私はこれからどうすれば……?」

「この二人についていって、世界を救ってこい。人間が所持している召喚とは逆に、魔族王は他の世界に転移する術を所持していると聞く。戻るには魔族王からその術を奪い、我が物にしなければならぬ。帰りがかったら二人の役に立ち、その術を手に入れるのだな」

王様は完全に私のことを見下しているようだった。

王様の目の前で私をこれだけバカにする二人……姫ちゃんに至っては、私をイジメていた人なのに、そんな二人について世界を救ってこい？ そんなの……絶対に無理だよ。「つてかさあ。里奈みたいな眼鏡デブについてこれるの、こっちから願い下げなんですけど。まあ、前みたいに姫の玩具でいいんだったら傍に置いておいてあげてもいいけどねえ」

ゾクリと背筋が冷える。学校でのことを思い出す。

嘲笑され、暴力を振るわれ、羞恥に満ちた地獄の日々。

嫌だ。姫ちゃんと一緒にいるだなんて、絶対に嫌だ！

「い、嫌だ……私、嫌だよ」

叫ぼうと思ったけど、震える声で絞り出すのが精いっぱいだった。

「だったらデブは出ていけ！ お前なんてこっちから願い下げよ！」

「そうだそうだ！ 眼鏡豚はさっさと出ていけ！」

「……………」

私を侮辱する姫ちゃんと下柳くん。王様達も二人の後ろで笑っているようだった。

私はいたたまれず、悲しみと恥ずかしさに耐えながらその場を逃げ出した。

外がどうなっているのか分からない。これからどうすればいいのか分からない。

だけど、どんな状況だろうと、姫ちゃん達と一緒に行動するぐらいなら一人の方がマシだ。

その思いのままに城を飛び出したら、大きな町が広がっていた。ぜえぜえ息を吐きながら、周りの人達を見渡す。海外の人みたいな見た目の人ばかりだ。それだけなら日本以外の国かなって感じだけど、武器を持っている人や商人のような人、ゲームでしか見たことのないような人達が当たり前のように歩いている。

本当に、異世界に来たんだ。

これからどうしよう……どこに何があるのかさえ分からない。それに、引きこもっていたせいで人と話するのが苦手になっているから、人が通りかかって何も聞けない。まるで迷子の子供だ。何をすればいいのか、どうすればいいのか分からない。

本当に子供だったら、ここで泣いてれば誰かが助けてくれるんだろうけど。

「……………」

私は子供じゃないし、泣いたって誰も助けてくれないのに、涙が溢れてくる。

なんて無責任な王様。なんて意地悪な同級生。なんて辛い現実。

私は……これからこんな世界で、一人で生きていかなければいけないんだ。いや、こ

んなところ、私一人で生きていけるはずがない。八方塞がりだ。

せめて他の誰かの迷惑にはならないように、と道の脇に寄って涙が止まるのを待っている、前を横切った親子の会話が耳に入った。

「いいかい、東にある崖には近づいちゃダメだよ。いいね」

「はい」

お母さんが自分の子供に言い聞かせている。

東にある崖……一体そこに何があるのだろうか。不思議とそれが気になって、東を目指すことにした。

どうせやるべきこともやりたいこともない。何気ない会話の中でも子供に言い聞かせるぐらい危険な場所なんだろうけど、もし死んでしまったとしても、それはそれで構わないとすら思ってしまった。だって、こんな場所で一人で生きていく自信もないし。

ため息をついて、町から出る。

町の外は草原だった。緑がどこまでも広がっていて、気持ちのいい風が吹いている。

こんな状況でも、ちよっぴり心が癒されるようだった。

「えーっと……東ってこっちだよな？」

ハッキリとした方角は分らないが、さっきのお母さんがこちらの方を指差していた。

だからこっちが東だと思うんだけど……悩んでいても仕方ない。とにかく歩いていこう。違ったら違ったらいいや。

そう思って歩き出したところで、早々に足を止めなくちゃいけない事態に遭遇した。

遠くの方に、王様が言っていたモンスターらしき姿が見えたのだ。緑色の肌の子供のような身体。顔はまるで鬼のようだ。前の世界のゲームに出てきたゴブリンに近いかな、こっちでもゴブリンって言うんだろうか？

そんなことを考えて恐怖心を紛らわせながら、コソコソ隠れるようにして歩く。ゲームでは序盤の倒しやすい敵であることが多いけど、今の私が見つかったら間違ひなく殺される。

だって私のスキルは【マイホーム】なんだから。どんなスキルなのかよく分かってないけど、少なくとも戦闘では全くの役立たずに違いはない。そりゃ姫ちゃん達に追い出されるのも仕方ないというものだ。追い出されなくても、姫ちゃんとは一緒にいたくないけれど。

ありがたいことに緑色のモンスターに見つかることなく、私は道を進むことができた。しかし東って……どこまで行けばいいの？

歩き出して数分、すでに私は息を切らしていた。マラソン選手が大会に出場して完走

しきった直後のようだ。引きこもりに運動はキツイ。それに体型が体型だから……自分のお腹をつまんで、うつすらと自嘲の笑みを浮かべる。

引き返そうかな、なんて考えがちらつとよぎるけれど、引き返したところで誰も私を助けてくれないし、他に当てもない。戻ったところで惨めな思いをするだけだ。

結局、私は諦めのような気持ちで、トボトボと道を歩くしかなかった。

「い、一体どこまで歩けばいいのお……？」

数時間後、崖の近くっぽい地形にはなったけれど、崖そのものはまだ現れない。こんなことなら崖なんて目指すんじゃないかった。子供に注意するくらいだから、小さい子でも簡単に行ける距離だと思っていた。

別に強制されたわけじゃないから嫌なら止まればいいのに、ここまでくると一種の意地みたいなもので、私はひたすら足を引きずっていた。でももう無理、もう死にたい、誰か殺して。

少し離れたところに緑色のモンスターがいる。あのモンスターの前に出れば私なんてさくつと殺されるだろう。

「……………」

やっぱり殺されるのは勘弁。死んでもいいと考えていても、殺されるのは嫌だ。

足を引きずり、さらに東を目指す。ようやく、崖らしきものが見えてきた。

「崖だ……！」

妙な達成感を覚え、私はドバドバ涙と汗を流しながら、最後の力を振り絞って崖まで走った。

そのまま崖の下を見下ろす。黒い霧がかかっている底が見えない。禍々しい雰囲気だ。なるほど、確かにこれは近づいちゃダメだ、と肌で感じる。

しばらく立ち止まって眺めていたら、達成感とかわるように徒労感が押し寄せてきた。「こんなところまできておいて、危険を確認して終わり？」

無意識に言葉を漏らす。何時間も歩いてきて、結果がこれでは救われない。そもそも、なんでこんなところが気になって、ここまで来ちゃったんだろう？

一度疑問が浮かぶと、全て悪い方に考え始めてしまう。なんか、全然いいことがないなあ。いつから私の人生、こんなになっちゃったんだろ。涙がこぼれる。さっきから泣いてばかりだ。

——この崖から落ちて、人生を終わらせてみるのも悪くないかも。

として頭に浮かぶ。

「……いやいや、やっぱり死ぬわけにはいかないや。折角お父さんとお母さんにもらった命なのに」

こんなところにいるからバカなことを考えてしまうのだと、踵を返しこの場を立ち去ろうとした。しかし、その瞬間、私の足元の地面が崩れ落ちた——崖の一部が崩れて、落下してしまったのだ。

ああ、これは死んじゃうな。

走馬灯の代わりにそんな諦めを抱きながら、私は黒い谷底へと吸い込まれていった。

谷底、黒荒地くろあれちと呼ばれるその場所には、黒いドラゴンがいた。

夜の如く黒い鱗に鮮血のような紅い瞳。生きたし生ける者全てが畏怖の念を抱くほどの巨体に鋭い爪。尻尾は大木のように太く長い。右前足には龍の鱗で作られた二対の腕輪がある。

そんなドラゴンは今、黒い霧がかかった荒地で、一人身体を丸めていた。

彼は孤独なのだ。これまでずっと一人で生きてきた。孤独は彼の心を氷のように冷たく、強くした。

一人でも生きていけるように。一人でも誰にも負けないように。一人でも涙を流さないように。

ずっと一人だったドラゴンは強くなり続け、いつしか邪龍などと呼ばれるようになっていた。

邪龍ヴォイドドラゴン——それが今の彼の名前だった。

ヴォイドドラゴンは、まどろみながら思考する。

これまでも、そしてこれからも一人で生きていく。自分以外の他の誰かなんて必要じゃない。

邪魔なだけだ。自分は全ての生物から忌避される運命にある。だから何もいらない。強さ以外は何もいらない……

そんな彼の頭上から、何かが降ってくるのが見えた。霧のかかった空を見上げ、禍々しい瞳を細めてその正体を視認する。

それは人間であった。この世界では珍しく眼鏡をかけ、平均よりも酷く肥えた人間だ。崖から転落したのか……

ヴォイドドラゴンは空から落ちるその人間を見上げた。そのまま墜落死するまで捨ておくか、死ぬ前に食らって一時の腹の足しにするか、普段であればその程度の選択しかなかった。

——だから、この時の彼の行動を、彼自身でさえ当時は理解できなかった。

あの子を助けるんだと心が叫び、何か考えるより先に翼を広げた。

それはきつと運命だったのだろう。空から落ちる人間——里奈とヴォイドドラゴンは出逢う運命にあったのだ。その運命がヴォイドドラゴンの背中を押す。

ヴォイドドラゴンは里奈の落下地点へと急いだ。そして衝撃を与えないよう、赤ん坊に触れるように柔らかに優しく、背中に彼女の体を乗せる。

「……………」

怪我はない。だが意識もない。このまま放っておけば、彼女は死んでしまうであろう。この黒い霧は人間が『瘴気』と呼ぶもので、人間が瘴気のある場所になんの対処もなく入り込めばすぐに死んでしまうと彼は知っていた。

この人間を死なせないで済む方法は二つある。

一つは自分が空気の新鮮な場所まで運んでやること。

そしてもう一つは、自分の血を分け与えること。龍の血を飲んだ者には力が与えられ

る。それが邪龍の血となれば、こんな瘴気ぐらい問題ないぐらいには身体が強くなるはずだ。

それらを当たり前のように検討している自分に気づいて、ヴォイドドラゴンは自分自身を嘲笑う。

「……人間に自分の血を分け与えるのか？ 馬鹿馬鹿しい」

自分の背中から里奈を下ろし、彼女を地面に寝そべらせる。そのまま里奈に背中を向け、その場で眠りにつこうとした。しかし、背後で横たわる里奈のことがどうしても気になり、彼女の方を振り向く。

「人間なんて、どうでもいいっていうのに……なんでこいつに限って……」

だがそこでヴォイドドラゴンは気づく。

彼女は——俺だと。

誰にも助けられず、こんな黒い世界で孤独に死んでいこうとしているその姿は、強く、なることができなかった場合に自分に待ち受けていた末路そのものじゃないか。

いつかどこかで誰かが言っていたことを思い出す。

『優しくしてもらいたいなら、優しくしなさい』

周りを気にかけることなく孤独に生きてきたから、誰が言ったのかは思い出せない。

ただ何故か、その言葉は心に突き刺さったままだ。いつもは忘れていたのに、ふとした時にこうして思い出す。今までは、優しくしたぐらいで優しくなんてしてもらえないはずがないと、その言葉が脳裏をよぎるたびに思っていた。

「……だけど」

もしも、その言葉が本当だったなら？

ヴォイドドラゴン 自分の指先を爪で傷つけた。数滴滴る赤い血を、里奈の口元に垂らす。里奈は意識のないまま、それをゴクリと飲み込む。熱にうなされるようだった表情が、一気に快方へと向かっていく。ヴォイドドラゴンはその様子を無言で見下ろしていた。

そうしていると、ゆっくりと里奈の目が開く。

「ん……」

里奈は目を開き、自分の目の前に立つヴォイドドラゴンの姿に顔面蒼白となった。

「え……えええっ!？」

悲鳴に近い声を上げて、両腕で自分自身を抱きしめるようにして、ガタガタ震え始める。

また同じか……誰もがそうだ。自分のことを怖がるんだ。誰もが、俺を忌み嫌うんだ。



そう考え、ズキンと心に痛みを覚えるヴォイドドラゴン。

しかし、里奈は違った。腕に触れたことで傷がないことに気づいたのだろう、はっとした顔をした後に、ヴォイドドラゴンの顔と翼を見て、その身体の震えを止めたのだ。

「あの……もしかして、あなたが助けてくれたんですか？」

「……………」

「……ありがとうございます。おかげさまで死なずにすみました」

里奈の真つ直ぐな笑顔。それはヴォイドドラゴンが初めて見る、優しい光景であった。黒い大地で、白く輝くその笑顔に、ヴォイドドラゴンは照れくさくなり、里奈から赤い瞳を逸らすのであった。

* * *

崖から落ちる途中で、私は氣を失っていたようだ。

そして目を覚ますと、目の前には大きく恐ろしい真つ黒なドラゴンがいた。とても怖い。だけど……少しだけ寂しそうな目をしている。

「……………」

このドラゴンが助けてくれたんだと判断してお礼を言ったけど、そっぽを向くだけで反応はない。いや、そもそも人間の言葉を理解できなくても不思議はない。

多分、私を助けてくれたのは、気まぐれとか、自分の住処に死体が増えたら嫌だとか、それくらいの理由だったんだろう。私は肩を落とし、この場を去ることにした。

それでも助けてくれたことに感謝し、私は大きく龍に向かって頭を下げる。そして私は踵を返して歩き出した。助けてくれた時に何かしてくれたのか、体が軽い。

「……おい」

「うえっ!？」

ズレ落ちそうになる眼鏡。私はアワアワと眼鏡を押さえて振り返る。

なんと龍が、人間の言葉を喋ったのだ。

いや、もしかしたらこの世界では常識なのかもしれない。さっき遠目に見たモンスターも人間の言葉を話すのかもしれない。

「な、なんでしょう?」

「……お前は、俺が怖くないのか?」

「怖くない……と言ったら嘘になるけど、でも龍さんは優しいですから」

「……………」

何も言わずに私を見下ろす龍さん。私もまた、無言で龍さんを見上げていた。意外となんとか会話できているな。姫ちゃん達とはまともに喋れなかったのに。

「……お前、俺が人間の姿の方が話しやすいか？」

「え？ はあ……見上げているのも首が疲れますからね」

「そうか」

それだけ言うと、龍さんの身体が真っ黒な霧のようなものに包まれる。周囲を漂う霧なんかよりもさらに黒い色だ。

そして霧が晴れると——そこにあった龍さんの姿がなくなっていた。

「あれ？ どこに行っただら……」

「おい、こっちだ」

龍さんの声だ。だけどさっきまでより小さくなったような……？

声の方に目を向ける。見上げていた視線をぐっと下げると、そこにはなんと、黒髪の美青年がいた！

「うわあ……」

サラサラの黒髪に炎のような赤い瞳。背は高く、体は細身だが筋肉質のようで、彼の肉体からは無駄という概念を感じ取れない。右手には、龍の姿の時にもあった腕輪が二

つある。海外俳優みたいにカッコイイ姿のその人は、何故か私を睨んでいるけど、悪意は含まれていない気がする。

この人……もしかして龍さん？

「え？ 龍さんですか？」

「だったらなんだってんだよ？ 悪いかな？」

「い、いえ……悪くありません」

私にとっては何も悪くないけど、彼は機嫌が悪そう？ 私がいるだけで、イラつかせているのかな……？ 私は視線を落とし、深くため息をつく。

「お、おい。なんで落ち込んでんだよ!!」

「だって龍さん、怒ってるじゃないですか」

「怒ってる!? そんなつもりはねえ、俺は怒っちゃいねえよ!」

ほんのり顔を赤くして龍さんは怒鳴った。

怒ってないなら、もっと静かに言ってくればいいのに。

「あと、お前。敬語は使わなくていい。普通に喋れ」

「あ、はい……じゃなかった、うん」

「……………」

「あの、ありがとね、龍さん。私のことを助けてくれて」

「別に……どうってことねえよ。大したことはやってねえんだから。あと、龍さんはやめろ」

「でも、名前知らないし……」

龍さんは嘆息し、腕を組んで口を開いた。

「俺はヴォイドドラゴンだ」

「……………」

「なんだ？」

率直な感想を言っているのか。いいよね、お世辞を言ったり誤魔化したりした方が怒りそう。

「いや、長いなって」

「長くて悪かったな！　じゃあ、お前の名前はなんて言うんだよ！」

「私は江藤里奈」

ヴォイドドラゴンさん……いや、ヴォイドドラゴン、でいいや……は私の名前を聞いて鼻で笑った。え？　そんなにおかしい名前かな？

「なんだよ、お前だって名前長いじゃねえか！」

「ヴォイドドラゴンより短いと思うけど……それに私の名前は里奈だし。江藤は苗字だよ」

「み、苗字……？　なんだそれ？」

ああ、苗字を知らないんだ。この世界には苗字がないのかな？　それとも、この人が苗字を知らないだけなのかな？

「んー。家族の名前？　みたいな感じかな」

「家族の名前……？」

「うん。一緒の家で暮らしている人同士が名乗るもう一つの名前だよ」

「そうなのか……お前——リナ」

ほんのり頬を紅潮させるヴォイドドラゴン。

「？」

「リ、リナは、どこに住んだ？　どうしてここに落ちてきた？」

ここに落ちてきた理由。落ちるまでにあったこと。それを思い出した瞬間、ポロリと涙がこぼれた。

「お、おい！　なんで泣いてるんだよ！　俺、何か言ったか？」

「ううん……ヴォイドドラゴンは何も悪いこと言っていないよ」

「だったら泣くんじゃねえよ！ おい、泣くなつて」

ヴォイドドラゴンとは、泣いている私の視界でも理解できるほど分かりやすく慌てた後、おずおずと私の頭に手を伸ばしてくる。そのままポンポンと私の頭を撫でてくれた。その手はとても温かくて、私にとって、久々の他人の優しさだった。

オドオドする彼に、私はこれまでのことをポツリポツリと説明した。すると彼は激しい怒りを露わにし、天を睨みつける。そう思ったら、今度は寂しさに満ちた顔で私を見た。

「……お前も俺と一緒になんだな」

「一緒？」

「ああ。皆からのけ者にされて、虐げられて……辛い者同士だな」

ヴォイドドラゴンも、好きでここに一人でいるわけじゃなくて、のけ者にされてここにいる……？ そうだとしたら、もしかして『ヴォイドドラゴン』って名前、この人の名前じゃなくて種族名か何かじゃないかな？

私は涙を拭き、彼の名前について思案した。本人は気にしてないみたいだけど、種族名で呼ぶのはなんとなく寂しい。長いなら短くしたらいいって理由もある。

「似た者同士だね、私達。ね、イド」

「……イド？」

「うん。私が呼ぶあなたの名前。愛称とかニックネームって言ってね、仲良くしたい人の名前が長い時は、短くして呼ぶことがあるんだよ」

姬ちゃんみたいなのに、もう絶対に仲良くなれないってなっても昔の癖が残っちゃうこともあるけど……ううん、姬ちゃんのこと今は考えない！

私が笑顔でそう言うと、イドは首を傾げながらも、頬を赤く染めているようだった。怖い見た目ののに……なんだかふとした仕草が可愛いな、イドって。

私は一度クスリと笑い、それから周囲を見渡す。ここは空気が悪い。黒い霧のせいでどこに何があるのか分からないし、なんだか変な匂いもするしでこんなところにいるら体調が悪くなりそう。

「ねえ、別の場所に行かない？ ちょっと空気が悪すぎるからさ……」

「お前は大丈夫だ」

「大丈夫って……なんで？」

「俺の血を分けてやったんだ。もうこの程度の空気ぐらいどうってことねえよ」

「ふ、ふーん……？」

よく分からないけど大丈夫なんだ。ここにずっといたっぽいイドがそう言うなら大丈

夫なんだよね。

「分かった。じゃあ気にしないようにするよ」

でもこの匂いだけはどうにかならないものかな……腐ったような匂いがしてちよっとキツい。

「……あ」

私はそこで、自分にスキルというものがあるのを思い出した。

【マイホーム】。それが本当にあるとしたら……まあ普通に考えて家だよな。家の中なら、この匂いもやりすごせるんじゃないだろうか。しかしどうやって使えばいいんだろ。もしかしたらイドが何か知ってるかもしれないな。よし、聞いてみよう。

「ねえイド。スキルってどうやって使えばいいのかな？」

「スキルだあ？ そんなの、こう、バンッ、って使えばいいだろうが」

イドは右手を前に突き出してそんなことを言う。

私は彼と同じように右手を突き出し、試してみる。

「バ、バァン！」

「……………」

何も発動しない。何も起こらない。

やっぱり【マイホーム】なんてスキルないんじゃないの？

項垂^{うなだ}れて苦笑いを浮かべる私に、イドが少し慌てた様子で言ってくる。

「お、落ち込むじゃねえよ！ 俺の教え方が悪かった……お前は悪くねえからな！」
怒鳴るような口調で優しいことを言ってくれるイド。

イドの優しさに胸がキュンとする。こんな風に私を気にしてくれる人がいるんだ。あ、人ではないか。まあどちらにしても、私のことを気にしてくれてるんだな。嬉しい。

「まず、お前のスキルはなんだ？」

【マイホーム】……

「なんだそりゃ？ 聞いたことねえな……じゃあとりあえず、そのスキル名を唱えてみるよ。それでだいたい発動すること多いし」

「そうなの？」

「多分だけだな。人間のスキルに関してはそこまで知ってるわけじゃねえが、戦ったことがある奴はスキル名を叫んだような気がする」

「そっか……よし」

私は深呼吸し、右手を突き出し、そして大声で叫ぶ。

【マイホーム】！

すると突き出した右手の先に、ボンッと大きな一軒家が出現した。まるで魔法だ。おとぎ話に出てくるような、不思議な力。

「おおっ……」

私とイドは感嘆の声を上げ、出現した家を見上げていた。

それは白をベースにした鉄骨二階建てで、玄関は元の世界でよくある細長いブッシュハンドルと呼ばれるものがついている。いくつもの窓が備え付けられており、屋根は瓦でできているようだ。

うん。この世界には似つかわしくない建物。どう考えても別世界の家にしか見えない。だけど私から見れば、見慣れた一軒家だ。

元の世界ではどこにでもあるようなもので、この世界にはどこにもなさそうなもの。

玄関の扉を開くと土間があり、靴を脱いで入るスタイルになっている。家は日本風の造りになっているのか……私の『家といったらこういうもの』ってイメージなんかが投影されてたりするのかな？ あまり難しく考えても仕方ないし、深く考えるのはやめておこう。

玄関の先には廊下が伸びており、右手に二階へと続く階段がある。

廊下の左手にドアが二つ。正面にドアが一つ。階段の下にドアが一つある。

「ここで靴脱いで」

「あ？ ああ……」

私はもちろん、人間の姿になっていたイドも靴を履いていた。それを脱いでもらい、一緒に中へと足を踏み入れる。

扉が閉じられたことにより、嫌な匂いが遮断された。ああ、良かった。ここなら匂いも気にせずに済みそう。

一番の心配事が片付いたので、早速家の中を見て回ることにした。まずは左手手前の扉。そこは六畳ほどの部屋で、物は何も置いていない。クローゼットがあり、玄関に面した方向に窓ガラスが設置されていて、外の景色を眺めることができる。

しかし外は霧がかかっていて、とてもじゃないが景色がいいとはいえない。むしろ最低といってもいい。

次に奥の左手の扉。そこを開くと、十二畳ほどの部屋。こちらにも窓ガラスが設置されていて、広々とした空間に私はワクワクする。

「凄く広い……一人暮らしたら持て余しちゃうよ」

「……これで広いのか？」

「広いよ！ だって私が住んだ部屋は、隣の部屋ぐらいたったんだよ。それなのにこ

こは倍ぐらい広いんだから、ずいぶん広いと思わない?」

「ま、まあ、倍になりや広いんじゃないの?」

「だよ」

私が笑顔を向けると、イドはブイと顔を逸らす。

やっぱりイドも姫ちゃん達と同じで、このスキル外れスキルだなんて思ってた、そもそも私と一緒にいるのが嫌だったりする……? って、ダメダメ! イドはそんな人じゃないはず! イドは優しい人のはずだから、姫ちゃん達と一緒にしたらダメだ。

気を取り直して、続きを見ていくことにした。階段下にある扉の中は……トイレだ。それも水洗便所。タンクレストイレ。トイレの音消し付き! これは言うことなしだよ。あまりの至れり尽くせりぶりに私は感動を覚える。

感激したまま、次は正面のドアを開いた。

すると中には、ぬいぐるみのようなものが地面に立っており、私を見るなりお辞儀をしてきた。

「おかえりなさい、リナ様」

「……ど、どなたでしょう?」

白い熊のぬいぐるみのような外見。でも背中には天使の翼が生えており、暖かそうな

マフラーを首に巻いている。

その子はパタパタとその翼を動かし、私の足元へと移動してきた。

まず言葉を喋ったことに驚き、そして動いたことに二度驚く私。この子は……?

「初めましてリナ様。僕の名前は……まだないからつけてくれないかな?」

「は、はあ……」

表情の変化は少ないが、身体全体で意思を伝えるように動かしている。見た目は可愛いし、悪い子じゃなさそう。

「なんだてめえは?」

だがイドは怪訝そうな顔つきで、その子を足先でツンツンする。

「僕は【マイホーム】のことをリナ様に説明するために生まれた存在。まあ簡単に言えばリナ様のサポーターだね」

「サポーター……?」

まるで【マイホーム】ってスキルには家が手に入る他にも何かありそうな口ぶりだ。もしもそうなら、説明があったらずいぶん助かるな。

「じゃあ、熊のぬいぐるみっぽいから……クマー!」

「ありがとう、リナ様」

ペコリと頭を下げるクマ。その姿がとても可愛らしくて、私はほっこりする。イドはまだ警戒しているのか、部屋に入って少し距離を取っていた。

この部屋はどうやらリビングのようで、お金持ちの家のような広々とした空間になっていた。綺麗で清潔そうなキッチンもある。

「早速だけど説明をするね。この【マイホーム】はリナ様の幸福度が高まること、そしてリナ様が善行を積むことによってレベルが上がるようになってるよ」

「ちょ、ちよつと待って……幸福度？」

「うん。幸福度」

幸福度って……幸せを感じる度合いってこと？ それにレベルって何？ 能力が強くなるのかな？

「現在の【マイホーム】のレベルは……どうやらずいぶん幸福度が低いんだね」

「あはは……まあ引きこもってたし、この世界に来て絶望してたしね」

そりゃ低くて当然。レベルが低いのも頷ける。

「レベルが上がったらどうなるのかな？」

「レベルが上がれば、この【マイホーム】でできることも増えていくよ」

「へー……ちよつと面白そうだね。ちなみに、今はどんなことができるの？」

するとクマはキッチンの方へとパタパタと飛んでいき、銀色のタブレットを持ってこちらに戻ってくる。……え？ タブレット？

「このタブレットは【マイホーム】と連動しているから、何ができるのかはこれを確認した方が分かりやすいと思うよ」

可愛らしい、声変わりする前の少年のような声でそう説明してくれるクマ。私は手渡されたタブレットを確認してみる。

マイホーム レベル 1

機能 空気清浄 I

「……空気清浄？ これだけ？」

「それだけみたいだね」

空気清浄だけか……と一瞬落ち込むも、中の空気がこんなに綺麗なのはこの機能のおかげなのかと納得する。外の黒い霧を遮断してるんだ。

「おい……そりゃなんだよ？」

「これはタブレットって言って……私が来た世界のオモチャみたいなものかな？」

オモチャではないけど、説明がややこしい。私は基本的にゲームに使ってたから、間違ってもいないよね？ 他にどんなアプリがインストールされているのか確認したら、現在のレベルを確認できる『レベル』というもののしか、画面には表示されていない。

「まあ、家があるだけマシか。野宿しなくて済みそうだし」

私が笑顔でそう言うと、イドは首を傾げて口を開く。

「なんでそんな笑ってんだよ。人間の常識はよく分からねえが、少なくとも今の状況は、お前にとってよくはねえんだろ？」

「んー……でも、イドもクマもいるし、一人じゃないもん。一人じゃないってだけで幸せじゃない？」

「……………」

キョトンとするイド。

これまで私は引きこもりで友達もいなくて……本当に寂しい生活をしていた。家族と会話はしていたがそれだけ。誰か話をする人がいるだけで幸せだったんだろうけど……こうやって家族以外の人と話ができるのが嬉しい。あつそういえばお父さんとお母さん……いきなり私がいなくなつて心配してるだろうな……そこだけは後悔だし未練ではある。だから、『よくはねえ』ってイドの言葉は正しくて、でもその上で、私にとって

最悪の状況ではない。

そういえば、イドとはもう普通に話ができる。元々は人と会話するのが好きだったし、それに彼が優しい心の持ち主だということを分かっているからだろう。

「俺も……ここにいれば一人じゃねえってことか」

「うん。イドがいるから私は一人じゃないし、私がいるからイドは一人じゃないよ。二人一緒なら寂しくないよね」

「そ、そうか……」

イドは驚いたような、嬉しいような、複雑な表情をしていた。私は少し不安になり、イドの顔を覗き込んだ。

「私と一緒に嫌？」

そりゃ私は眼鏡で太っていて可愛くないし……こんな女といっても嬉しくはないか。少し私が落ち込むと、イドは腕を組んで顔を逸らす。

「お、お前がいて……嬉しくないことないんだからな！」

「へ？」

これは……ツンデレ？ しかし、ツンの部分が少ないように思える。可愛い……デレ要素の方が強いイドは可愛いよ。デレが強いから、これは表現するならツンデレデレだ。

イドの新たな一面に、私は感動を覚えていた。胸がポカポカしてほっこりする。なんだか友達の間になかった顔を知れたみたいで嬉しいなあ。

すると、クマの目がピコーンと光る。

「リナ様」

「ん？ どうしたの？」

「【マイホーム】のレベルが2になったよ」

「え……？ レベルが上がったの!？」

いきなりのことに唖然としつつも、嬉しさに胸を踊らせタブレットを確認してみる。

マイホーム レベル2

機能 空気清浄Ⅱ 身体能力強化Ⅰ ショップⅠ

「おお……『身体能力強化』というのと『ショップ』というのが追加されてるよ！」

「なんだそりゃ？」

「これはね……なんなの、クマ？」

イドが私に訊いてくるが、当然のように答えられない私。クマは可愛らしい声で私達

に説明してくれる。

「『身体能力強化』はそのままの意味で、リナ様の身体能力が上昇するよ。『ショップ』はまあいわゆるネットショッピングが可能になる機能だね」

「へー！ ネットショッピングができるんだあ。凄い便利だね」

まさか異世界に来てネットショッピングができるなんて、嘘みたい。タブレットにも『ショップ』のアプリが追加されている。

試しに『ショップ』のアプリを立ち上げてみると、世界的に有名なネットショップに似た画面が表示された。商品はというと、日用品などを購入できるみたいだ。歯ブラシや石鹸にシャンプー、他にはティッシュなど、生活必需品がごまんと並んでいる。

「これは便利だね。本当にありがたいよ」

「で、それはなんなんだ？」

「これを使うだけで買い物ができるんだよ」

「？ 買い物って……どうやって買うんだ？ 意味が分かんねえ」

多分この世界にインターネットはないし、万一あったとしてもイドは絶対に知らない。ネットを知らない人にネットショッピングを説明するのは難しいな……なんて説明すればいいんだろ。

「んとね……人と会わなくてもこれで注文するだけで商品がここに届くんだよ。難しいことは分からないけど、とにかく商品が届くの」

「……やっぱ意味分かんねえよ」

頭をかくイド。まあ一度買っているところを見せた方が早いな。

というところで、私は早速ネットショッピングで買い物をすることにした。

「これとこれと……あとはこれも必要だよね」

タブレットを操作し、必要なものを買いたい物かごに入れていく。今までの人生でこれほどまでに爆買いをしたことがあるだろうか？ 私はウキウキしながらタブレットで注文をしていく。

「これで合計いくらだろ……って、お金はどうするの!？」

ここで大事なことを思い出す。

そうだ……お金はどうすればいいんだ？ 購入画面を確認してみると、やはりお金は請求されている。そりゃタダってわけないよね。私は苦笑いし、クマの方を見る。

「買い物はこの世界の通貨でできるよ」

「この世界のお金か……イドはいくら持ってるの?」

「俺!? 持ってるわけねえだろ。俺はドラゴンだ。人間の通貨なんて興味もねえし必要

ねえんだよ」

「そっか……そうだよね」

私は腕を組んで頭を傾ける。

「うーん……お金はどうやって稼げばいいんだろ?」

「方法としてはいくつかあるよ。一つは純粹にこの世界で労働すること」

「うん。いきなりハードルが高すぎる。人のいる場所まで帰る方法ないし、帰ったところで働かせてもらえないよ」

「他には、モンスターを狩ってお金を稼ぐ方法があるね」

「うん。それはもっと不可能だよ。だって私戦えないし」

「俺がいるだろうが」

「え?」

当たり前のように指摘してきたイドの方を見れば、彼は照れくさそうに言う。

「お、お前が戦えないってのなら、俺が戦ってやる。モンスター倒すぐらい、俺から言わせりゃ朝飯前だからな」

「そ、そうなんだ……でも、イドにそんなことやってもらうのは悪いよ」

「べ、別に悪くねえよ……」

「でも……」

申し訳なさに私がシュンとしていると、イドは声を荒げる。

「お、お前のためにやってやるって言ってるんだよ！」

「イド……」

イドの優しさにうつかり泣きそうになる。こんないい人、今まで見たことない。自分なんのメリットもないのに助けてくれるなんて、底なしの善人だ、イドは。

「ありがとう、イド」

「か、勘違いするなよな！ お礼を言われたいためにやるんじゃないからな！」

それは分かっています。本当に素晴らしい人だと分かっています。だから大感謝。嬉しくて嬉しくて涙が出ちゃう。

「じゃあ私もイドのためにできることをするね」

「あ、ああ？」

「だってそうでしょ？ イドが私に優しくしてくれてるんだから、私もイドの優しさにお返ししたい。でも……本当は理由なんて必要ないの。私、純粹にイドが喜ぶ顔が見たいんだ」

「っ……」

イドは不意に、私から顔を逸らす。逸らしたかと思うと、肩を震わせていた。

「……イド？」

「な、なんでもねえよ！ とにかく、明日から俺がお前の代わりに狩りをやってやる！ いいな!?」

「うん！ 私もイドにしてあげられることはなんでもやってあげるね！」

「……おお」

イドは顔を逸らしたまま、ガラス戸から外を眺めていた。

外はすでに真っ暗だ。黒い霧がかかっているからなのか、夜だからなのかは分からない。だけどイドが明日からって言っているから、夜なのだろう。もう遅い時間だから戦いにいけないというわけだ。

「じゃあこれからよろしくね、イド」

「おお……よろしく」

私を手を差し伸べると、彼は照れくさそうに私の手を握り返してくれる。

姬ちゃんと再会した時は地獄にでも来た気分だったけど、今はなんだかワクワクが止まらない。きっと明日からは、楽しい生活が待っているはず。イドの横顔を見て、そんな確信が胸の中で咲き始めていた。